



Title	日本語の省略現象
Author(s)	甲斐, ますみ
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.11501/3171194">https://doi.org/10.11501/3171194</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	甲斐 ますみ
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第2号
学位授与年月日	平成12年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	日本語の省略現象
論文審査委員	主査 教授 三原 健一 副査 教授 小矢野 哲夫 副査 助教授 田野村 忠温 副査 教授 仁田 義雄 副査 教授 尾上 新太郎

## 論文の内容要旨

本稿は、話者と聞き手によって作り上げられる日本語の談話を対象とし、談話における省略現象について考察する。そして、様々な省略現象のうち、名詞句の省略に焦点を当てる。

第1章では、何を省略と呼ぶかの定義付けを行い、第2章では、これまでの省略研究を概観する。続く第3章、第4章では、省略現象を捉えるための方策として、「情報ベース」と「リンク」という二つの概念を提示する。これらは、本稿での議論の根幹をなす概念である。

話者と聞き手は、発話の進行に従ってオンラインで「情報ベース」という概念スペースを構築する。そしてこの情報ベースを活用することによって、話者は文中の要素を省略し、聞き手は文中の要素が省略された発話の解釈を行うことが可能となると仮定する。情報ベースにインプットされる要素（「情報要素」）は、発話の場面に存在する対象、談話の中で言語化された要素、そしてそれらの属性および要素間の関係などが挙げられる。また知識や共有情報なども情報ベースにインプットされることがあるが、これらは通常、それぞれの情報の保管庫に仕分けされて保管されている。この情報の保管庫を本稿では「情報領域」と呼ぶ。話者と聞き手は、談話の展開の中で、現在問題としている発話内容に関わる情報を、情報領域の中から必要に応じて参照し、あるいは引き出して、情報ベースにインプットする。

情報ベースには、談話処理に最も有効で最小の要素のみがインプットされる。情報ベースにインプットされる情報要素は、談話の流れの中で随時キャンセルされ、新しい情報要素にとって変わられ得る。こうした要素は、話者と聞き手の意識の中で活性化されている要素である。一方、発話の現在において、情報ベースにインプットされていないが、参照されている情報は、半活性化状態にある。しかし、情報領域に貯蔵されていて、参照されていない情報は、発話の現在において非活性化状態にある。

話者は、情報ベースにインプットされている情報要素の中から、ある要素を前景化し、一連の発話を行うことがある。この前景化された要素を本稿では、「心理的トピック」と呼ぶ。談話の中である情報要素が前景化されると、それに情報を付加する発話が引き続き行われ、前景化された心理的トピックは、省略可能となる。

情報ベースは、省略現象を説明する基本的概念であるが、談話が複雑になると情報ベースに加えて、情報ベース内にある要素と要素間の意味的關係、あるいは、発話と発話の間の意味的關係を捉える道具が必要となる。その道具として、「リンク」という概念を提示する。

リンクには、五つの下位タイプがある。「論理的リンク」、「語彙的リンク」、「認知・概念的リンク」、「知識のリンク」、「情報のリンク」である。前景化された心理的トピックを中心として行われる一連の発話は、さまざまなレベルで働くリンクによって結束される。そして、明らかなリンクがあればあるほど、発話と発話の結束性は強くなり、心理的トピックは省略され易くなる。

以上が情報ベースおよびリンクの大まかな説明である。第5章以下の考察は、これら二つの概念を用いて行う。

第5章、第6章では、1・2人称主語と省略との関わりを論じる。

情報ベースにインプットされ得る要素には、発話の場面に存在する対象がある。発話の場面に存在する対象には、話者と聞き手がいる。そして一般的に、話者や聞き手を指す1・2人称主語は省略が可能であると言われている。しかしながら、たとえ話者や聞き手は発話場面に存在するとしても、発話場面自体とは別個の談話という概念領域では、話者や聞き手を指示する名詞句が無条件で省略可能というわけではない。1・2人称主語の言語化・非言語化の振る舞いは、談話における主語の意味機能にコントロールされている。談話における主語の意味機能は、主語として言語化された名詞句の指示対象が、その他の主語となり得る対象とどのような関係を持っているかによって決定される機能である。

本稿では、主語の意味機能として、「完全排他主格／完全対比主題」「相対排他主格／相対対比主題」「論理的唯一主格／論理的唯一主題」「完全唯一主格／完全唯一主題」の四タイプを挙げる。主語名詞句が「は」を伴うか「が」を伴うかは、文構造、述語の意味など、主語の意味機能とは別のレベルで決定されるため、本稿では、問題の主語がその他の主語となり得る対象とどのような関係を持っているかという点では、「は」主題と「が」格主語を同一に扱えると考ええる。

「完全排他主格／完全対比主題」は、省略が不可能であり、主語は言語化しなければならない。一方、「完全唯一主格／完全唯一主題」は、主語を言語化することができず、主語は義務的に省略される。「相対排他主格／相対対比主題」は、主語が予測可能か否かによって二つのタイプに分かれる。主語が予測可能な場合には、言語化・非言語化ともに可能であるが、予測不可能な場合には、主語を省略することはできない。「論理的唯一主格／論理的唯一主題」は、文脈や話者と聞き手のもつ共有知識、述語情報、談話における卓越性などから、主語が唯一的に予測可能なタイプであり、それ故、主語は言語化・非言語化ともに可能となる。

従属節の主語についても、主語の意味機能が関わっている。南不二男(1974)は「従属句」の階層を、描述や判断といった意味機能に基づいてA、B、Cの三类に分け、その内部に現れ得る成分について論じている。主語と従属節との関係について言うと、A類の従属節は、「は」主題も「が」主格も現われることができない。B類の従属節は、「は」主題は現われることができないが、「が」主格は現われることが可能である。C類の従属節は、「は」主題も「が」主格も現われることができる。しかしながら本稿では、こうした従属節のタイプだけでは談話の中での主語の言語化・非言語化の振る舞いを規定できないと考える。談話における主語の言語化・非言語化は、南の言う従属節の階層性をベースとして、主語の意味機能によってコントロールされる。A類の従属節は、「は」主題も「が」主格も現われることができないので、省略とは関係しない。B類の従属節は、「が」主格のみが現われることができ、その言語化・非言語化については、主格に関する主語の意味機能によってコントロールされる。C類の従属節は、「は」主題も「が」主格も現われることができ、その言語化・非言語化の振る舞いは、単文の場合と同じである。

談話を構成する文の構造には多種多様なものがあるが、第7章では、質問とそれに対する答えという質疑応答ペアの発話について考察する。質疑応答ペアの発話における答えの部分は、省略が起こりやすい。というのは、話者からある不確定部分を含む命題が提示され、聞き手は少なくとも求められているその不確定部分を満たす情報を提供すればよいからである。そこで問題となるのは、反復言語化(くり返し)の可否である。

久野暲(1978)、牧野成一(1980)、高見健一(1995、1997)は、くり返しの可否を、情報の新旧のバロメータによって説明する。しかし本稿では、情報の新旧という概念は、くり返しの可否を決定する第一義的要因ではないと考える。くり返しの可否を決定する要因は、情報の新旧ではなく、取り消し可能性である。取り消し不可能な情報は、応答発話でくり返すことができない。それに対し、取り消し可能な情報は、応答発話においてくり返すことが可能である。それは、取り消し不可能な情報が、発話の前提情報であるからである。

文の命題は、命題構築要素、命題付加要素、スペース設定点の三つからなる。yes-noタイプの疑問文の場合、命題構築要素は述部に対する必須成分であり、くり返しの可否については、その要素が取り消し可能情報か否かに依る。命題付加情報については、「で」格成分や様態副詞が、述語部分の行為や状態のあり方を強く限定し、また、述語部分が前提情報を表す場合には、必ずくり返さなければならない。しかし、量の副詞や、述語部分が取り消し可能情報であり、疑問の焦点でない様態副詞の場合には、くり返しは恣意的となる。スペース設定点は、時の副詞や主題化された場所を表わす成分などであるが、こうした要素は、聞き手が情報ベースにアクセスするためのいわば入口的役割を果たすため、くり返しについては、恣意的となる。

whタイプの疑問文については、yes-noタイプの疑問文と異なり、「で」格成分のくり返しは恣意的であるが、その他の要素については、yes-noタイプの疑問文と同じ振る舞いが観察される。

第8章では、談話の内部構造に焦点を当て、談話の意味的な切れとつながりについて見ていく。続く第9章では、主題と省略について考察する。Hinds and Shibatani(1977)および Walker, Iida and Cote(1974)は、省略されている要素は、前の文の主題であると述べている。しかし本稿では、省略されている要素の指示対象が、必ずしも前の発話の主題とは限らないことを示す。そしてまた、同一主題の連続であっても、続く発話の中で主題が再言語化され、省略すると不自然となる場合があることを示す。更に、前の発話で主題である要素が、続く発話の中で格成分になった場合、あるいは、格成分が続く発話で主題となった場合、省略される場合と省略されない場合があるが、これらはすべて、情報のリンクおよび話題の変換の有無という要因が関わっていることを主張する。

たとえ同一主題の連続であっても、前後の文脈に情報のリンクが存在しない場合や話題が変換する場合には、主題は再言語化され、省略すると不自然となる。話題が変換しておらず、前後の文脈に情報のリンクが存在する場合は、問題の要素が文法的にどのような役割を担っていようと、省略可能となる。

砂川有里子(1990)および J. Hinds and W. Hinds(1971)は、時空間のギャップやその他の登場人物の介入によって、主題の省略がブロックされると述べている。しかしこれらの要因は、第一義的なものではなく、省略をコントロールする最大の要因は、情報のリンクおよび話題の変換の有無である。たとえ時空間のギャップやその他の登場人物の介入があったとしても、前後の文脈に情報のリンクが存在する場合には、要素の省略は可能となる。

第10章では、発話の解釈に推論が関わる例を取り上げる。リンクによって誘発される推論、聞き手が文脈にそってイメージを作り上げることによって発話の解釈が可能となる「空間イメージ省略」、「メトニミー」が関わる省略、の三つのタイプを挙げる。ただし、このような推論が関わる省略は、まだ未解明の部分が多く、詳しい分析は将来の課題である。

## 論文審査の結果の要旨

本博士論文は日本語の談話における名詞句の省略について論じたものである。日本語は、西欧系言語に比して文・談話中で名詞句の省略を幅広く許容する言語であり、省略現象に関する先行研究も膨大なものがある。理論言語学(特に生成文法理論)においても、省略現象は中心的研究課題の一つであり、ゼロ代名詞(zero pronoun)という概念を中核として多くの研究がある。また、談話構造を解明しようとする分野においても、話題の導入と、その話題の後続談話中での非言語化に関して幾ばくかの知見が蓄積されている。が、前者においては、研究対象が主として単一文(従属節を含む)に限定されており、談話に関する理論が未開拓である現段階において、談話中での省略はインターフェイス(interface)外の現象として今後の研究に委ねられている。そして後者においても、極めて形式化し難い談話原則のために、真に科学的な研究が達成されているとは言えない現状である。つまり、ひとことで言えば、談話中での省略現象について、現段階では、満足のいく説明がなされていないということである。

本博士論文は、以上の現状に鑑み、以下の諸点についての詳細な記述と、その理論的解決を提案するという極めて野心的な試みである。(1) 談話中に既に導入されている名詞句でも、それ(ら)が会話参加者の間で活性(active)状態にあるか、あるいは半活性(semi-active)状態・非活性(inactive)状態にあるかで省略可能性が異なる。このことは、「情報ベース」からの出力の差(「リンク条件」あるいは「心理的トピック条件」)などの装置を用いることで、理論的に説明することが出来る[第3章]。この章は、次章以下の分析に対する理論的中核をなす章である。(2) 第3章で概括的に述べられた「リンク」を、「論理的リンク」「語彙的リンク」他、5つのリンクに下位区分することで、より細かい現象の記述・理論化を行っているのが第4章である。(3) 以下の6章は、これらの理論的装置を援用することにより明らかになる現象の、「各論」的記述とその理論化にあてられている。それら全てをここでまとめることは、当審査要旨の目的ではないので割愛するが、実質的な貢献をなしている幾つかの点について略記しておきたい。

会話現場に存在する1人称・2人称主語は、その顕在性の故に常に省略可能と言われてきたが、実際には情報ベースやリンクの差異によって、省略可能となる場合と不可能となる場合があること[第5章、第6章]。談話における名詞句の「繰り返し」が、やはり上記諸概念の規制を受けることで言語化され得ること[第7章]。これらのことは、先行研究においては散発的な観察に留まってきた事項であり、これを詳細に記述し理論的に解明した(あるいは「しようとした」)ことは、今後の研究に対する大きな指針となり得るものと高く評価される。

以上のように、本博士論文が、談話における名詞句の省略現象に対して多大な貢献をなすものであることは疑いない。ただ、主指導教官(三原)の専門分野である理論的統語論の観点からすれば、言いたいことがない訳ではない。本博士論文の第5章・第6章で扱われている現象は、主題の「は」の脱落、あるいは格助詞脱落と密接に関わるものであり、生成文法などでは精密な理論化が既に行われている。本博士論文は、談話を扱うという明確に提示された方法論の故に、単一文に興味がある生成文法理論の成果は全く利用されていない。理想化(idealization)の過程を経てインターフェイス外の要因を注意深く sort out してゆけば、談話文法原則が、最も理想化された状態で文文法において機能するという命題が、最近の三原の認識であるが、この点についての考察がなされていないことは残念である。また、本博士論文の方法論に準拠するとしても、例えば、5種類設定されているリンク間の相互関係(どの要因が最優先されるか)など、「各要因間の階層性」が十分に論じ切られているとは言えない点も存する。

しかしながら、著者は既に10年に亘る研究歴を有しており、日本語の省略現象に関して必ず引用される論文も多数刊行している。また、上で繰り返し述べてきたように、現段階において満足のいく説明がなされていない談話中での省略現象について、一つの指針を与え得た点は、いくら評価してもし過ぎということはないであろう。以上のことを総合的に考慮し、本審査委員会は、博士の称号を授与するに十二分に足る業績であるという点において、全委員の意見の一致を見た。